

暮らしの中でその人らしい意思決定を支えるために

医療法人社団オレンジ理事長 紅谷 浩之

私たち医療法人オレンジグループは、在宅医療や街中の保健室、医療的ケア児支援などを通して、病気や障害を持っていても、誰もが地域社会の中であたりまえに暮らせる地域づくり・文化づくりをコンセプトに活動しています。「その人らしい意思決定を支える」ことは、これら地域活動においてとても重要なことと感じています。

これまで、本人による意思決定という「事前指示」というかたちで、望むことを言語化してはっきりと断言的に記載することと考えられてきました。しかし、在宅医療の現場ではこの「事前指示」の取り扱いの難しさによく出会います。将来を予想すること自体が難しいことであること、また断言的な方針を本人が記載していても、なぜその選択をしたのかが不明瞭であったり、今現在も同じ気持ちでいるのかどうかを確認することの難しさから、結果的にその「事前指示」の内容を医療・ケアの選択に活かせないということがしばしば起きてしまいます。

そこで、希望する選択の結論ではなく、話し合いの流れ、“プロセス”を共有することで、どう考えているかについて深く理解しようとする、つまり価値観を理解することに重要性を置く「人生会議（アドバンスケアプランニング）」が重要と考えています。

プロセスや価値観、というものは断定的な指示と比べて判断に迷うように思う方もいるかもしれませんが、実際に起きる複雑な出来事に対して、「あの人ならどんなふうに考えるか」というふうに考えることが出来るようになります。「きっと父（母）ならこういうふうに考えそうだね」という納得感を、話し合うメンバーで醸成しながら進んでいくイメージです。治療や療養の選択という小さな視点ではなく、その人が重ねてきた人生の最終章に近づいたときの、その人らしい選択を支えていくことをイメージしたとき、病状や症状コントロールの話だけでなく、暮らしや家族にも視野を広げる必要があります。それを行う場として、生活している「家」や「地域」というのはふさわしい場所であると思います。そして、病気についての知識を持ちながら、人の暮らしにも視点をもつことのできる専門職として、看護師の活躍が期待される現場です。

できれば、深刻な病気を持つ前からこの「人生会議」を重ねることが理想です。そういう意味でも病院中心の意思決定支援よりも、暮らし中心の意思決定支援が望ましいと考えます。そして、病気を持ったり、老いを感じたりすることで、対話をさらに深めていく必要があります。時間軸を持って、また入退院などのイベントで更新される「自分らしさ」を追いかけることも重要となります。こういった時間によって変化していく想いに伴走することも、医療機関単位で考えていては難しく、地域全体で取り組む必要性があります。退院支援・訪問看護・地域の保健室活動などを通して、こういった時間軸の長い視点を持つことも看護師の得意分野だと考えています。

歳を取ったり病気を持っていても、その人が持つ、自分のことを決める力をエンパワメントすることで、その人らしい意思決定を支えあえる、そんな社会は、病人を弱者として管理するのではなく、人生の最後までをその人らしく過ごすことの出来る、そんな成熟した贅沢な多死社会になるのではないのでしょうか。